

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	23 / 2008 / 31-35
タイトル	津軽に来てから 50 年(第 2 回)
著 者 名	葛谷孝

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

特別寄稿

津軽に来てから50年 (第2回) ー弘前中央高校時代ー

顧問 葛 谷 孝



[写真1] アブラチャン



[写真2] オオバキスミレ



[写真3] ザゼンソウ



[写真4] 顧問からマイヅルソウの和名由来の説明を聞く弘前中央高校生物部員達

生物部の顧問に

昭和 38 年 4 月から弘前中央高校に転勤になった。生物部の顧問になったのは勿論である。

昭和 36 年 3 月に結婚したので、八幡様の入り口近くに家を借りて、弘前の人間になった。

わずか 2 年の短い期間であったが、結構あちこちに出掛けた。春の採集会(生物部員と顧問の顔合わせの意味も兼ねている)は、岩木山の登山口(百沢口)のある桜林方面に行った。岩木山神社の境内には、いろいろ春植物が咲き乱れて奇麗であった。思い出しながら紹介すると、キクザキイチリンソウ・セリバオウレン・オオバクロモジ・アブラチャン(写真 1)・ツノハシバミ・スミレサイシン・ニオイタチツボスミレ・オオバキスミレ(写真 2)・カタクリ・エンレイソウ・ザゼンソウ(写真 3)などが咲いていた。これらは現在でも健在なので興味のある方は春に桜林方面や岩木山神社の境内を散策することをお勧めする。

アブラチャンに女子生徒プンプン

生物部のある部員が恐る恐る質問しに来た。「先生、仏焰苞が真っ黒なミズバショウなんてあるのでしょうか。」。私は、どうせ仏焰苞が泥で真っ黒になっているか、枯れかかっているのかと黒ずんでいるのだらうと思ったが「初めて聞く話だ、生えている所へ案内してもらおう」と言って案内してもらおうと、仏焰苞が真っ黒なミズバショウではなく、ザゼンソウであった。すぐに生物部員を集めてザゼンソウの話をした。ついでにマイヅルソウの語源を説明する(写真 4)。ザゼンソウの発見者を本日の最大の功労者として紹介した。生物部部長が黄色い細かな花をつけた枝をもって来て「これは何という花ですか」と聞いたので「アブラチャンです。」と答えたら、その生徒は「先生、まじめに教えてください」と、プンプン怒っているのでも女の子は気難しくて困ると思った。実は部長の名字は油川と言うのであり、通称(愛称)はアブラチャンであった。そこでからかわれたものと勘違いしたものと分かり、後で大笑いしたものであった。

生物部には、あと座頭石と言う所と久渡寺山と言う所を案内してもらったがいずれ落ち着いてからじっくり調べようと考えていたところ、わずか2年で青森市に転勤になってしまった。

印象深い八幡平の植物

弘前中央高校時代に特に印象深かったのは、夏休みに八幡平に高山植物の観察に行った事である。

最初に八幡平に行ったのは木造高校時代の教員の研修旅行であった。この時、八幡沼の斜面で見たヨツバシオガマ(写真5)の美しさが筆舌に尽くしがたい。

現在の八幡平は道路が整備されているが、当時は自分の足だけが頼りで、ヨツバシオガマはそんな状態の時に遭遇したので、中でも美しく感じたのである。

八幡平にはその後も何回も出掛けたので、弘前中央高校時代に調査した内容とは異なるが、八幡平の高山植物の説明を試みよう。私の手元に工藤茂美著「八幡平の花」と言う写真集がある。著者は小学校の校長先生で、拙著「八甲田の花」を出版するきっかけを作った写真集の一つである。

この写真集を手に入れたのは昭和38年であり、その後10回以上行っているので大体のことは分かっている。昭和30年代には、玉川温泉から入山して焼山の裾を通して毛氈峠(もうせんとうげ)を歩いて後生掛温泉、蒸の湯温泉から頂上まで歩いたものだった。後生掛温泉・蒸の湯温泉に2泊せねばならなく、出掛けるには(特に生徒を引率して行くには)、ある程度の覚悟が必要だった。その後八幡平アスピーデラインという道路が整備されてから、1泊すればゆつくり花を見てくることができる。



[写真5] ヨツバシオガマ



[写真6 A・B] ガンコウラン、上♂下♀



[写真7] ミヤマホツツジ

玉川・焼山周辺の植物

100℃以上の噴気孔から98℃の熱湯やガスが吹き出ている玉川温泉は壮観である。こうした所では普通の植物は少なく地衣類が多い。周囲の斜面に見られるキタゴヨウ林中のナナカマドは紅葉が美しい。新緑・黄葉ともに美しいブナ帯を登ると焼山で、初夏のハクサンシャクナゲと秋のナナカマドの眺めは(紅葉)、八幡平随一であろう。風雪をまともに受ける毛氈峠は、ガンコウラン(写真6A・B)が絨毯のように広がっている。以下に紹介する植物の配列は順不同、以下同じ。

オオバスノキ(ツツジ科)・ギンリョウソウ(イチヤクソウ科)・コケモモ(ツツジ科)・コメバツガザクラ(ツツジ科)・オノエラン(ラン科)・エゾホソイ(イグサ科)・ミヤマホツツジ(ツツジ科、写真7)・シラタマノキ(ツツジ科)・ガンコウラン(ガンコウラン科)・ハイマツ(マツ科)・ナナカマド(バラ科)・イワカガミ(イワウメ科)・ツマト



[写真8] サドスゲ



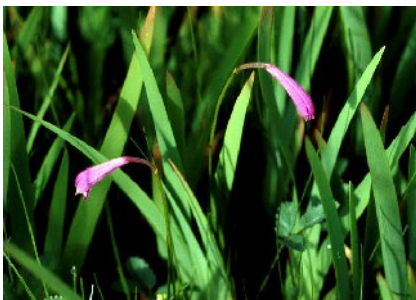
[写真9] ヤナギラン



[写真10] イソツツジ



[写真11] ウラジロヨウラク



[写真12] サワラン

リソウ(サクラソウ科)・ゴゼンタチバナ(ミズキ科)・ハクサンシャクナゲ(ツツジ科)・ヒロハハリブキ(ウコギ科)・アカモノ(ツツジ科)・ブナ(ブナ科)・オオカメノキ(スイカヅラ科)。

大沼周辺の植物

八幡平の秋田側の玄関口である大沼までくると、ブナ・アオモリトドマツなどが見られ、ようやく高山気分になる。大沼は周囲に広い湿原を伴い標高 944m。低地性、高山性の植物が混生して植物見本園の様である。種類も豊富で初夏にはミズバショウ・タチギボウシ、秋にはアイバソウや周囲の紅葉が楽しめる。季節ごとに植物群落が交替し、美しい花が咲き競うのは、八幡平では此処だけである。

ミズバショウ(サトイモ科)・エゾノリュウキンカ(キンポウゲ科)・サドスゲ(カヤツリグサ科、写真 8)・ホロムイスゲ(カヤツリグサ科)・ミズドクサ(トクサ科)・ミネザクラ(バラ科)・ノリウツギ(ユキノシタ科)・ウワミズザクラ(バラ科)・オニシモツケ(バラ科)・ズダヤクシュ(ユキノシタ科)・レンゲツツジ(ツツジ科)・ヤナギラン(アカバナ科、写真 9)・ホツツジ(ツツジ科)・ホソバキソチドリ(ラン科)・ミズナラ(ブナ科)・モウセンゴケ(モウセンゴケ科)・サワギキョウ(キキョウ科)・ハンゴンソウ(キク科)・オクトリカブト(キンポウゲ科)・ツルシキミ(ミカン科)・ハイイヌツゲ(モチノキ科)・ウワミズザクラ(バラ科)・ヤマブドウ(ブドウ科)・ヤマウルシ(ウルシ科)・ツタウルシ(ウルシ科)・アイバソウ(カヤツリグサ科)。

後生掛・蒸の湯周辺の植物

八幡平と言えば此処の蒸し風呂の話が出るほど有名である。タケノコやフキを採りながら春の湯治を楽しむ人は多い。温泉の周囲はブナ帯で、所どころにキタゴヨウも混生している。キタゴヨウはこれより高いところでは見られない。オナメ(妾)、モトメ(本妻)の物語を秘める二大噴気孔と泥火山は一見に値する。硫気に強いコタヌキラン・イソツツジ(写真 10)のほか、ウラジロヨウラクのピンクの花が美しい。

ウラジロヨウラク(ツツジ科、写真 11)・オオバタネツケバナ(アブラナ科)・ミネヤナギ(ヤナギ科)・アカミノイヌツゲ(モチノキ科)・ハウチワカエデ(カエデ科)・キタゴヨウ(マツ科)・ヒロハユキザサ(ユリ科)・ネムロコウホネ(スイレン科)・クロバナロウゲ(バラ科)・エゾノヒツジグサ(スイレン科)・ミズギク(キク科)・サワラン

(ラン科、写真 12)・トキシソウ(ラン科、写真 13)・コアニチドリ(ラン科、写真 14)・ツルアジサイ(ユキノシタ科)・ノウゴウイチゴ(バラ科)・エゾオヤマリンドウ(リンドウ科)・マイヅルソウ(ユリ科)・オオバタケシマランの果実(ユリ科、写真 15)。

頂上・八幡沼周辺の植物

チシマザサ(タケ科)・ウスバスミレ(スミレ科、写真 16)・ミツバオウレン(キンポウゲ科)・ショウジョウバカマ(ユリ科)・ニッコウキスゲ(ユリ科)・ミヤマカラマツ(キンポウゲ科)・モミジカラマツ(キンポウゲ科)・ミヤマキンポウゲ(キンポウゲ科)・キンコウカ(ユリ科)・ヨツバシオガマ(ゴマノハグサ科)・ハクサンオオバコ(オオバコ科)・オオカサスゲ(カヤツリグサ科)・オオバノヨツバムグラ(アカネ科)・ムツノガリヤス(イネ科)・イワオトギリ(オトギリソウ科)・ミヤマアキノキリンソウ(キク科)・ミネハライ(イグサ科)・ミヤマホタルイ(イグサ科)・ミヤマホソコウガイゼキショウ(イグサ科)・クロヌマハライ(イグサ科)・チングルマ(バラ科)・ネバリノギラン(ユリ科)・ダイヤモンドソウ(ユキノシタ科)・イワカガミ(イワウメ科)・ウメバチソウ(ユキノシタ科)・イワショウブ(ユリ科)・イブキボウフウ(セリ科)・カラクサイノデ(ウラボシ科)・キヌガサソウ(ユリ科)・ミヤマハンノキ(カバノキ科)・アオノツガザクラ(ツツジ科)・イワツツジ(ツツジ科)・オオカメノキ(スイカヅラ科)・アオモリトドマツ(マツ科)。

モッコ岳・藤七温泉周辺の植物

頂上から藤七温泉へ向かう道をたどるとモッコ岳の雄姿が手前に、晴れた日には鳥海山、月山なども遠くに望まれる。

モッコ岳・大深山への道の両側はハイマツ林で、根元が白く枯れ高山の厳しさを物語っている。この周辺には乾地性のシダ類が多く、藤七温泉への道路の斜面も、早くから植物の豊富さで知られ、シナノキンバイの群落は岩木山の雄姿を背景に美しい眺めを作る。奇岩に富む蓬莱峡はコメツガの古木が多い。

ヤマハハコ(キク科)・オオバミゾホオズキ(ゴマノハグサ科、写真 17)・タカネニガナ(キク科)・マルバシモツケ(バラ科)・クルマユリ(ユリ科)・ミヤマアズマギク(キク科)・ウサギギク(キク科)・タカネアオヤギソウ(ユリ科)・シロバナトウウチソウ(バラ科)・オオバキスミレ(スミレ科)・シナノキンバイ(キンポウゲ科)・コメススキ(イネ科)・ヤラメスゲ(カヤツリグサ科)・イワキスゲ(カヤツリグサ科)・シラネアオイ(シラネアオイ科、写真 18)・サンカ



[写真13] トキシソウ



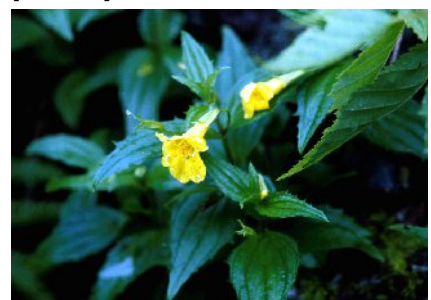
[写真14] コアニチドリ



[写真15] オオバタケシマラン(果実)



[写真16] ウスバスミレ



[写真17] オオバミゾホオズツキ



[写真18] シラネアオイ



[写真19] オオタカネイバラ



[写真20] エゾツツジ



[写真21] ハクサンチドリ



[写真22] ヒメシャクナゲ

ヨウ(メギ科)・ムラサキヤシオツツジ(ツツジ科)・ミヤマヘビノネゴザ(ウラボシ科)・コメツガ(マツ科)。

茶臼山・源太森周辺の植物

車でアスピーデラインを走ると、両側に枯れたアオモリトドマツ、ダケカンバの荒涼とした景色が目につく。道路開通によって植物社会のバランスが崩れた結果である。しかし、茶臼山・源太森を経て頂上へ向かう道は余り人は通らず、頂上から見下ろすとアオモリトドマツとダケカンバの混生林が美しく広がる。オオタカネバラ(写真19)・エゾツツジ(写真20)など八幡平では珍しい植物もこのあたりに多い。

カワズスゲ(カヤツリグサ科)・エゾシオガマ(ゴマノハグサ科)・ハクサンチドリ(ラン科、写真21)・トウゲブキ(キク科)・ツルコケモモ(ツツジ科)・ヒメシャクナゲ(ツツジ科、写真22)・エゾツツジ(ツツジ科)・オガラバナ(カエデ科)・ツルリンドウ(リンドウ科)・イワナシ(ツツジ科)・オオタカネバラ(バラ科)・ノハラアザミ(キク科)・ヤマソテツ(キジノオシダ科)・ツバメオモト(ユリ科)。

追記

前回は「木造高校時代」をとりあげた。その後、資料を整理していたら自然科学部生物班の写真(写真23)が見つかったので掲げた。

次号は第3回として「県立理科教育センター時代」をとりあげる。

引用文献： 工藤茂美、八幡平の花、1979、加賀谷書店



[写真23] 木造高校科学部生物班員(屏風山生物採集会にて)